

# いのちを支えて

県内緩和ケアの現場から

□□□ 6

「ホスピスって、金持ちしか行けないところだと思ひ込んでいた」と加茂市の男性（モ）が口にした。妻は舌がリンパ節に転移し、昨年十月、ホスピスに転院した。

看護師がかいがいしく床擦れの処置や痰の吸引をしてくれた。闘病中に訴えた呼吸の苦しさも収まった。一月に六十八歳で亡くなるまで、毎日通った男性は「眺めの良い個室や駐車場の広さ、スタッ

## 割安な負担

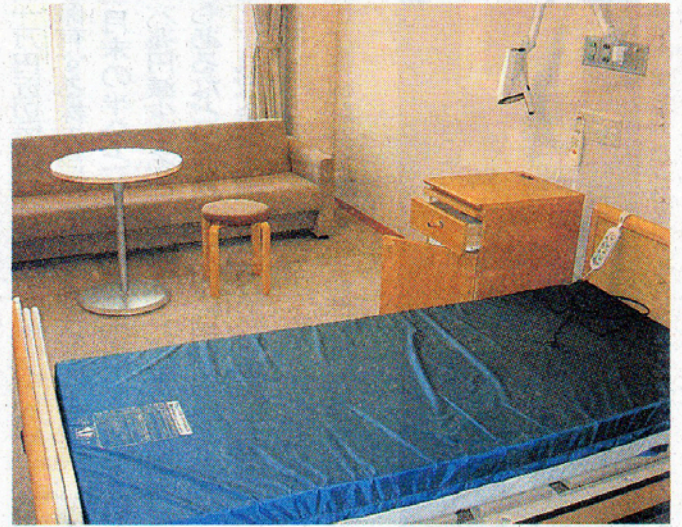
フの対応などに満足し「（室料）をゼロとした」と感謝する。個室なのに部屋代は無料だった。転院前の大部屋では一日数千円を無料提供する病棟も。男性はいま「ホスピスが割安なのは、驚いた」と実感を込め

# 個室が無料の病棟も

## 料金体系定額制で安心感

入院に伴う経済的負担は、限りある人生を有意義に過ごしたいと願う患者や家族たちにとって思わぬ「苦痛」となることがある。

ホスピスや緩和ケア病棟の場合、およそ半数の病床は、国の基準



緩和ケア病棟には室料無料の個室がある。ただ、待機患者がいても空きベッドが目立つ川五泉市の南部郷厚生病院「郷和」

「退院」に対する考え方の違いもある。一般の病院では、診療報酬の目減りを防ぐため、入院後三カ月を境に暗黙で退院を迫る「三カ月ルール」がある。しかし、ホスピスには、こうしたルールがない。「高齢の方は特に安心感があるようだ」と丸山さんは話

同ホスピスの料金体系では、患者一人当たりの医療費支払額は医療保険三割負担者、一割負担者ともに月九万円前後（オムツ代など実費別）。七十歳以上ならその半分程度で済む。国の助成対象となるため、負担はかなりの軽減される。

さらに、白根大通病院ホスピス医療ソーシャルワーカーの丸山恵理さん（三）は「安さというよりは、費用対効果が大いではないか」と感触を語る。

緩和ケア事情に詳しいある医師は「安心感はあるものの剣になってきた」と話す。手厚い看護や病棟の雰囲気、薬の投与など

「痛みをコントロールできるようにした人から自宅に戻す仕組みづくりを急ぐべきだ。そうでないと、本当に緩和ケアが必要な人ほど病棟に受け入れられずに亡くなってしまふ」。現場に近い医師は危機感をあらわにしている。

すみか 居場所 求めて